

## 方言会話の方言地理学的研究は可能か

江 端 義 夫  
(1989年9月20日受理)

Does a Dialect-Geography of Dialect-Speech exist ?

Yoshio Ebata

This paper aimed at describing the following five facts:

- (1) The term, dialect-speech, must be different from a discourse which includes the folk's writings.
- (2) It might be possible to apply the study of a daily speech for the development of the traditional methods.
- (3) The linguistic map of Morning Greeting is analysed as a case study of the dialect geography.
- (4) Three kinds of the Waving Intonation which can be heard over the Hokuriku district covering Fukui, Ishikawa and Toyama prefectures.
- (5) It might be recognized that the potencial function of the intonation can be found in ending particles expressing the familiarity.

### 一、方言談話でなく、方言会話を

方言会話という術語よりも方言談話という術語のほうが、学会および一般社会において、より広く用いられているかもしれない。南不二男氏は談話について、「それは、常識的に見てなんらかの意味でひとまとまりになった言語表現であるということ的前提として、考えを出発することにする。話しことばか書きことばかということは問わない。」(『談話行動の諸相』5頁、1987年)

と言っておられる。また、談話という術語は、「談話を発表した」とか「用意した談話を読みあげた」とかのように、書かれた文書をも含んで使用されることがある。方言の世界での場合は、書かれた文書を意味することはないので、こうした点を考慮に入れるとすれば、むしろ、方言会話という術語のほうが分かり易い。したがって、方言の独話や対話を一まとまりの単位として考えていこうとするときには、方言談話という術語を避け、方言会話という術語を使うほうが、話しことばとしての方言の実質に叶うはずである。

方言会話は、書かれた文章までを含まないのである。寄り合いで発言するために用意したメモや、回覧板の文章などは、まとまりのある方言談話の可能態と見ら

れよう。談話といった場合には、どうしても、書きことばの意味を完全に払拭することは困難である。

今まで、方言談話資料という言い方がなされ、各地の生きた日常会話が文字化されてきているが、厳密に言えば、これらは方言会話資料と言うべきものであろう。

ところで、書かれたものにしる、書かれていないものにしる、口頭語化することを視点に含むものが、談話ということであろう。それに対して会話というのは、書きことばを全く意図していないという点が大きな特色である。話者の話しことばだけが問題となるのであって、仮りに文章化されたりしたものが見られたとしても、それらを同一次元でのごとくとはしないのである。たとえば、書かれた民話集や口説きや、その他の口ことば資料が得られたとしても、それらを方言会話と直結させて扱わないことは言うまでもない。こうして、方言談話と方言会話との間には自らの違いがあるので、それを認めていこうと考えている。

したがって、いわゆる談話研究<sup>1)</sup>と筆者が考えていこうとする方言会話の研究とは、資料の見方に根本的な違いがある。方言の研究が、生きた人間のことばを対象とするかぎり、会話の成立する以前からすでに研究が始まっているのは、当然であろう。

## 二、方言会話の通時論的研究へ

日本における談話の研究は、戦前から「文章規範」の視座を通して着実な進展を見せてきていたようである。さらに時枝誠記氏<sup>12</sup>が言語研究の単位として、「語」「文」に加えて「文章」を提唱して以来、この方面の研究は注目を浴びることとなった。

ところで、すでに早くから西尾実氏<sup>13</sup>による言語生活の研究に見られるような国民的課題が、国立国語研究所の創設目的をうたった設置法（1948年）に見出されるように、時代の精神として存在したようである。

さて、方言研究界においては、方言を生活語と理念化することで、人間言語を根本から問い直していこうとする藤原亨一氏<sup>14</sup>の考え方が、高くそびえ立つことになった。地方では、方言会話の文字化を通して、方言の統体に目を向ける松田正義氏<sup>15</sup>や文アクセントに関心をよせる山口幸洋氏<sup>16</sup>の活躍が目立った。中央では、林四郎氏<sup>17</sup>や南不二男氏<sup>18</sup>らが、言語モデルまたは言語行動観に立ち、言語行為を記号化しようとしておられ、言語表現の構造化が進められたようである。

もちろん、文法論では語法から文法へ、文法から連文論へと議論は展開した。一連の流れの中で、永野賢氏<sup>19</sup>、市川孝氏<sup>10</sup>、長田久男氏<sup>11</sup>らの仕事に目を見るものがあつた。啓蒙的な書物も、昭和30～40年代に多く出て、文章研究の気運は高まったと言えるようである。

それとは別に、人口の都市集中化と農山村の過疎化が進み、道路の開通が行われて、旧来の純粋な集落性が昭和40年代以降に、急速に失われていった。「方言がなくなる！今保存しておかなくては、永遠に消えていってしまう！」という危機感が方言研究者の間に生まれた。幸いに、簡便な録音器も普及して、方言会話を生のままで録ることができるようになった。かくして、国立国語研究所の仕事として、各地の方言談話の録音と文字化が行われ、大きな財産が後世に残ることとなった。これは、日本言語地図と並べても劣らない程に貴重な仕事であるが、これらの生資料の使い方について十分な研究がなされていないために、人々の注目を集めることが少ない。

ところで、おそらく日本は世界で最も録音器の普及している国であろうと思う。小型の録音器で、簡単に日常の会話を録音することができるようになった。一家に一台ずつラジオがあつた時代は、今から40年前のことであろうか。今では一家に一台ずつ、録音器を持っている時代だといえるであろう。たくさんの録音テープを個々人が所持しているわけである。

さて、これらの録音テープをもとにして、どのような高次の研究をうちたてていくかということが、我々の今日的課題とされなければならないだろう。

ちなみに、T. A. Van Dijk 編 HANDBOOK of DISCOURSE ANALYSIS I～IV, 1985 の論文題目に目を通してみた。第一巻は Disciplines of Discourse とあり、11編を収めている。ここには社会的あるいは心理的な分析は見られても、それらは全て共時論的な研究と思われるものばかりである。第二巻は Dimensions of Discourse とあり、文法や音韻論その他の視点からの分析が見られる。しかし Linguistic Geography of Discourse という題の論文は見られない。第三巻は Discourse and Dialogue となっている。会話の場面本位の研究のようである。第四巻は Discourse Analysis in Society となっている。社会的属性と談話との交渉が問題となっている。以上の4巻で世界の談話研究を総括するつもりはない。また一方、月刊『言語』（大修館書店）の談話についての諸論文は、昨今顕著であるが、扱っている問題は、会話の自然性を維持するための文法規則についての論議が多いようである。日本での若手の談話研究者の場合は、欧米の研究に類同するかと思われるが、行動と言語とを関連づけたユニークなものも見られる。従来文章研究に多年たずさわっている研究者は、日本語教育とのからみで論を組み立ててゆかれるようになってきているかと思われる。

さて、国内外の discourse 研究に欠けているものは、方言会話（または方言談話）の言語地理学的研究であると思う。談話を通時的にとらえ、地理的環境の中で考察することが、今後の課題になるであろう。筆者は、今後、言語地理学を拡大し、文化地理学としての方言類型論地理学が発展することを期待している。

## 三、方言類型論地理学的事例

方言の発想法や文接続の趣向などが、地理的に伝播することを問題とする。従来民俗学や音楽学の畑で、民具や祭礼の様式や詞章が伝播したり、民謡のリズムが伝播したりしたのも、広やかに方言の伝播と同様に、文化の伝播と考えることができるだろう。文化一般の伝播を考えるとすれば、従来言語地理学の方法をすぐには適用できにくいと考えられるので、これらを文化次元に持ちあげ、方言類型論地理学として、とらえ直すことを提案してみたいと思う。言語そのままではなくて、統合化または抽象化のレベルを高めたところで、地理的比較による通時の研究を行おうとするものである。

(一) 朝の挨拶表現の発想法について

方言類型論地理学の事例として、あまり適切ではないが、中部地方の方言の「あいさつことば」を、発想法に注目して作成した分布図がある。それが図1である。

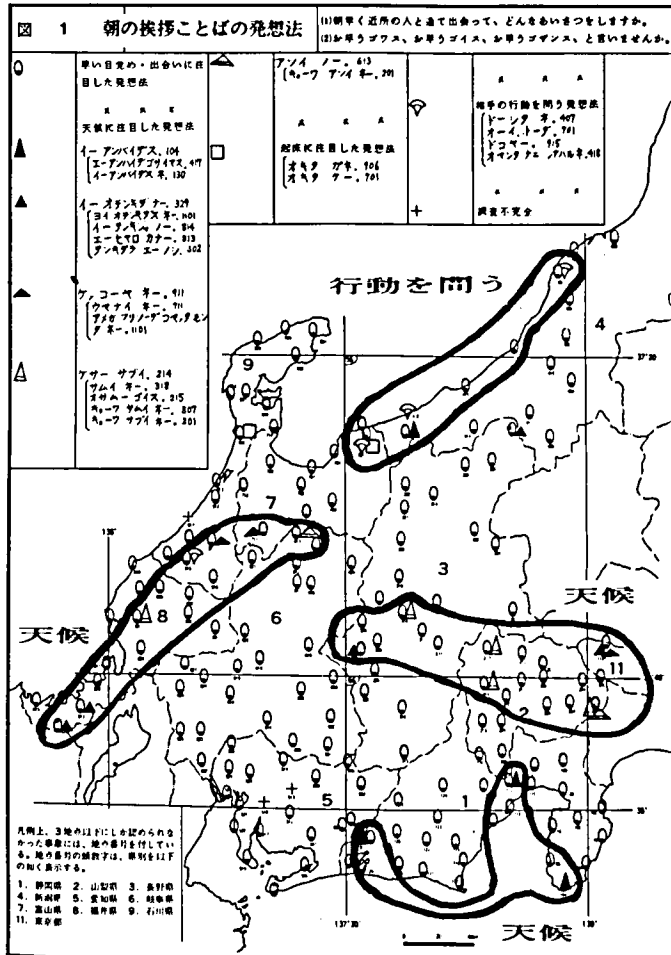
図1は、朝の挨拶会話の全体をとらえて地図化したものではない。質問文で分かるとおり、朝早く近所の人と出会ってする挨拶ことばの典型例に注目している。最近の敬語法の研究状況からすれば、場面の限定をもっと厳密に行うのが望ましいし、挨拶会話のやりとりを実際に再現して収録した資料に基づいて地図化を行うべきであろう。理想どおりには調査を実行できなくて、古い資料を使わざるをえなかった。

さて、図1では、全域に「オハヨーゴザイマス」などの「早い出掛け、早い出会い」に注目した発想法の表現が分布する。標準語でも、「お早うございます」の言い方が、朝の挨拶の定型と見なされている。した

がって、これと併存する言い方こそ、土地ごとの特色を示すもの言いとして関心がよせられる。図1で、枠で囲んだ所がそれである。すなわち、北陸地方の「天候」に注目した言い方、長野県、山梨県あたりの「天候」に注目した言い方、さらに静岡県沿岸に散在する「天候」を問う言い方が見られる。新潟県と富山県の日本海沿岸に「行動を問う」発想法が見られるが、中部地方では、これは特殊と見てよいかもしれない。起床に関する言い方が、富山県と石川県とに見られる。発想法の分布する地点数が顕著に見られるものから順に書き出せば、

- ① 早い出掛け、早い出会いに注目した発想法
- ② 天候に注目した発想法
- ③ 相手の行動を問う発想法
- ④ 起床に注目した発想法

のようである。①は単独でも存立するが、②③④は他の事象と共存するのが通例である。



ところで、挨拶表現が挨拶連文をとることが多いということになれば、それらの間の順番や組み合わせということが重要な問題となる。方言会話の主題(話題)の展開が、特に関心のよせられるところである。

そこで、次には、朝の挨拶文の接続法について考えてみたい。

(二) 朝の挨拶表現の接続法

広島大学方言研究会『方言研究年報』(第6巻、1963年)によれば、あいさつことばは図2のように、I~Nの発想法で、文例および会話が報告されている。記述は文例があったり、会話があったり、さまざまである。日本全国の記述の方法は必ずしも統一されていない。しかし、一定の質問形式に応じたものであり、資料の信頼度は高い。筆者なりの基準に基づいて、発想法中心に文例を数量化すると、図2のようになった。特に、「早い出掛け、早い出会い」の発想は、全国的である。しかし、「起床」に注目した言い方が、沖縄だけに多いのは興味深い。また、「相手の行動を問う」発想の挨拶表現が九州や沖縄や四国に多くて、東日本や中国、近畿地方には少ない。天候に注目した発想は、図1において分散しており、図2においても分散している。

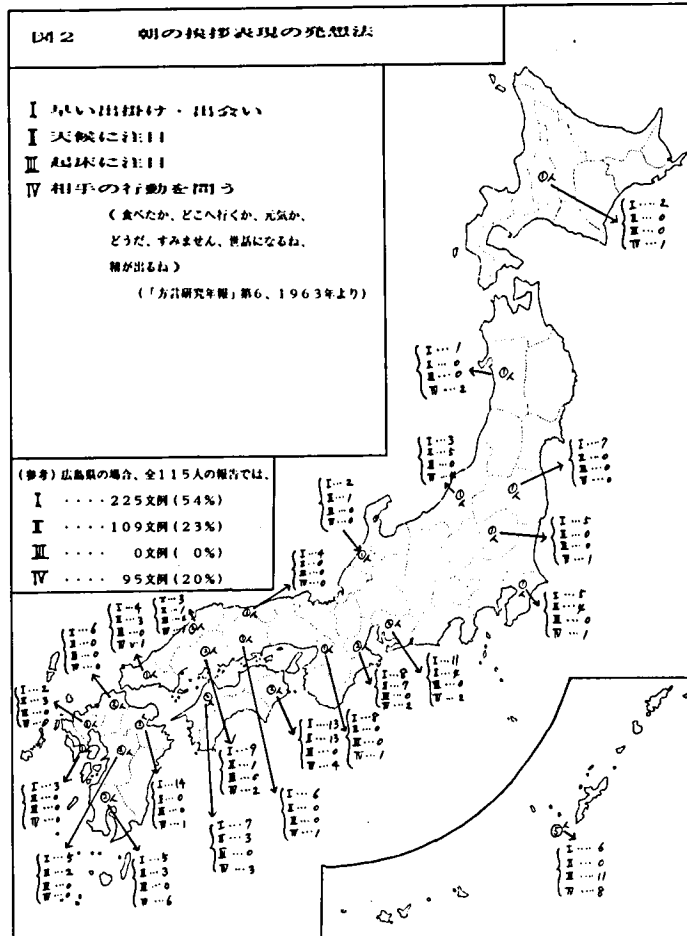
四国や近畿や関東に、恣意的に見られるようである。

図2では、I～Vの各発想法の組み合わせの数字が多いものほど、頻用されている言い方だと考えてよい。ただし、すべての組み合わせについて質問したのではない。年報第六巻に記述された限りでの整理の枠をこえることができない。たとえば、この外に、

I→II、I→III、I→IV、II→I、II→III、II→IV、III→I、III→II、III→IV、IV→I、IV→II、IV→III

のように、2種の発想法の接続の可能性を検討してみたくなる。三つの発想法の出現順序についても、可能性と実際とを対照させてみたい。たとえば、

I→II→III、I→II→IV、I→III→IV、I→III→II、II→I→III、II→I→IV、II→IV→I、II→III→I、III→I→II、III→I→IV、III→II→I、III→II→IV、III→IV→I、III→IV→II、IV→I→II、IV→I→III、IV→II→I、IV→II→III、IV→III→I、IV→III→II



のように、挨拶文の接続の可能性が考えられよう。これらの三文接続の中でも、地域ごとに一定の傾向があるのではないかと予想される。そうした着想で、方言会話の分析を行ってみたいが、手元に、自然な挨拶会話の分布を論じるのに耐えられる資料を、未だ整えていない。

さらに、また、4つの挨拶文の組み合わせをつくり、  
I→II→III→IV、I→II→IV→III、I→III→II→IV、I→III→IV→II、I→IV→II→III、I→IV→III→II、II→I→III→IV、II→I→IV→III、II→I→III→IV、II→I→IV→III、II→III→II……

のように、朝の挨拶の発想法を、文接続法として検討してみれば、合理的な結論が得られるであろう。今は、ただ図1、図2で見られた限りの平面的な事実しか分からない。朝の挨拶会話についての豊富な資料が全国的に集積されれば、上記の操作が可能になるであろう。それと同時に、文接続の型が伝播する様相とその理由の推定も、興味ぶかきに相違ない。これらの発展的課題を促す資料が、上掲の図1、図2で見られた分布である。

図1、図2には、今後の研究の多くの萌芽を見出すことができる。

図1、図2には、今後の研究の多くの萌芽を見出すことができる。

#### 四、方言会話中の「波動音調」を対象とした方言地理学的研究の試み

北陸地方で聞かれる「波動音調」について、方言地理学的な研究を行ってみたい。この波動音調は話者が無意識に発しているものだと言われたり、対人関係が仲間内の関係にならないと出現しないとも言われたりしている。いわば幻の音調と言ってよいものである。この音調またはアクセントは、その実態がまだ十分には明らかにされていない。

そこで、波動音調の見られる会話をはじめとする方言会話の方言地理学的研究のために、最も自然な調査が可能ないように、次のような調査条件の統一をはかってみた。

##### 《調査条件の統一》

- ①臨地調査であること。
- ②話者は60歳以上の生え抜きの女性1人。町内からの嫁入りであること。
- ③調査者は一人とする。話者と調査者が1対1で

対話することを原則とし、同席者を排する。④調査場所は玄関口または居間とする。晴れがましい場所を避けること。⑤話体について調査者は原則として共通語を使用し、上待遇語の「デス・マス・ネ」を使用する。⑥調査資料の斉一性を重視し、1976年時に収録したものに限定する。⑦話題は話者の好みに従い、随意的な進行に任せる。⑧昔慣じみの土地人同士が話し合っているような、純粋な自然会話が醸成できるように、誠心誠意を心掛ける。⑨自然会話を録音する。

《資料の性格》

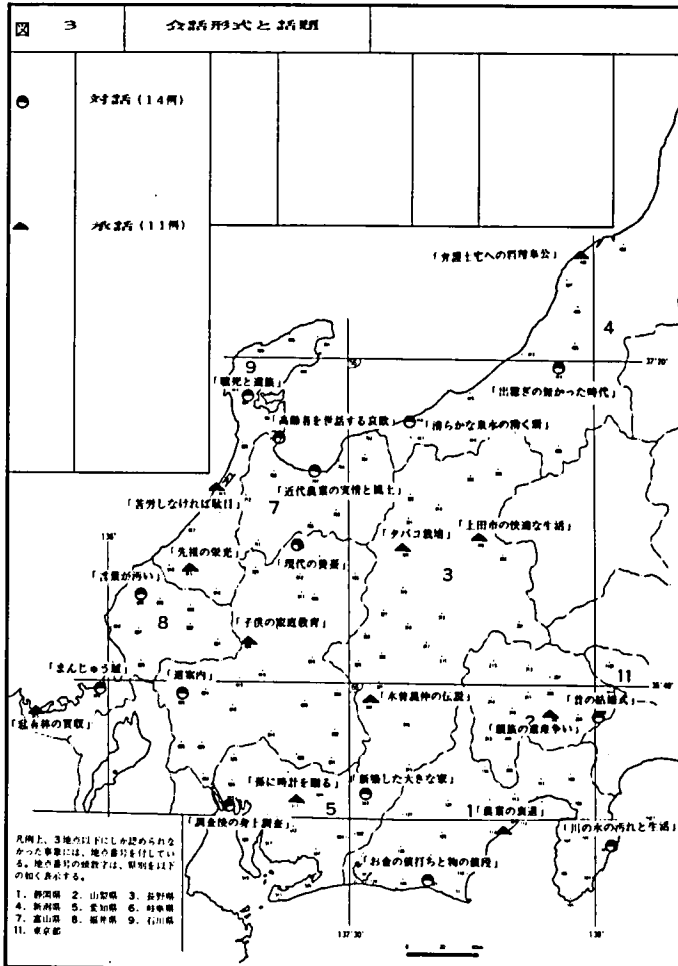
このように調査条件の統一をはかって得られた録音について、おのおの2分間を、ストップウォッチで計測して、比較的まとまりのある会話部分を文字化して、共通語訳をつける。これが今回の作業の資料となる。一県3地点ずつの方言会話を資料として、以下の考察を行う。(中部地方の各県で10地点以上について、文字化資料を整えるつもりであったが、不本意ながら、

一県3地点ずつとなってしまった。分布を論じるには、粗すぎるので、自重しながら記述するつもりであるが、もしも断定的に分布を述べているやに見えた場合は、意図が先走ったものとお考えいただきたい。)

(一) 会話形式による「波動音調」の出現差

自然会話は、会話形式によって、対話と承話とに分けられると思う。対話は2人が対等に発言し、話題が双方の活発な発言で編まれ展開していくものである。これに対して承話は、2人のうちの一方が話し手となり、他の一方が聞き手となって、役割が固定し、専ら特定の話題についての独話を聞きとるといった形のものである。対話と承話との精確な区別は、むずかしい。筆者が方言会話の25地点分を通して聞き、2つに分類したものである。

図3によれば、25の方言会話は、対話14例、承話11例ということになっている。これは偶然の結果である。



北陸地方に聞かれる「波動音調」の具体例の一部分を後に掲げるが、石川県小松市大杉本町に見られる波動音調と、福井県福井市下市町に見られる波動音調は、筆者の分析では同じ型が認められるのに、小松市のほうは承話であり、福井市のほうは対話である。このことから、会話形式のちがいでによって波動音調が出たり、出なかったりするということではないと思われる。そのことと連動して、話題が話者の得意なものであるとか、不案内なことがらであるとかいうことも、波動音調の出現に、あまり関与するとは言えないということが明らかになった。

(二) 三種類の波動音調の事例と分布

波動音調は、会話形式や話題の種類によって出現したりしなかったりするものではないことを踏まえた上で、以下には、波動音調に3種類の型があることを、実例で明らかにしていきたい。

北陸地方に見られる波動音調は、以下の3種類が確認される。

- ① ……X型
- ② ……Y型
- ③ ……Z型

X型は、一拍分の卓立と急激な降下とが認められる音調である。Y型は、一拍以上の長呼の末尾音がなだらかに上

昇させられる音調である。Z型は、卓立と降下とを組み合わせた型であり、X型やY型とは若干の趣きを異にする。たとえばZ型は単語の次元に主として現出するが、X型とY型とは単語よりも大きな単位間に現われがちである。ただし、それは法則的ではない。以下に、具体例を掲げる。(Eは対話者である筆者を意味する。)

① X型……

実例1 福井市下市町 角野すみを (明41)

(笑) ココ<sup>ラ</sup>デ キタ オバ<sup>チ</sup>ヤン<sup>ラ</sup>モ コンナ  
 こ<sup>こ</sup>ら<sup>で</sup> き<sup>た</sup> 婦<sup>人</sup>ら<sup>も</sup> こ<sup>ん</sup>な

ザイ<sup>ノ</sup> ソマ<sup>レ</sup>ヤシ (Eハイ。) アンナ  
 在<sup>郷</sup>の 生<sup>ま</sup>れ<sup>だ</sup>し (はい。) あ<sup>ん</sup>な

コッカ<sup>イ</sup>ラ ホン コン ザイ<sup>シ</sup>ヨ<sup>エ</sup>  
 こ<sup>こ</sup>ら<sup>あ</sup>た<sup>り</sup> 正<sup>に</sup> こ<sup>の</sup> 在<sup>所</sup>に

ムカ<sup>ー</sup>シカラ<sup>ノ</sup> ホン ソマ<sup>レ</sup>タ<sup>モ</sup>ンヤ<sup>デ</sup>   
 昔<sup>か</sup>ら<sup>の</sup> 正<sup>に</sup> 生<sup>ま</sup>れ<sup>た</sup>者<sup>だ</sup>から

(E<sup>ソ</sup>。) コト<sup>バ</sup>ガ キタ<sup>ネ</sup>。  
 う<sup>ん</sup>。 昔<sup>葉</sup>が 汚<sup>い</sup>。

E イ<sup>エ</sup>イ<sup>エ</sup>。 ソ<sup>ー</sup>ユ コト ナ<sup>イ</sup>ス  
 い<sup>え</sup>い<sup>え</sup>。 そ<sup>う</sup>い<sup>う</sup> こ<sup>と</sup>(は) な<sup>い</sup>で<sup>す</sup>

ヨ。 ダイ<sup>タイ</sup> ド<sup>コ</sup>デ<sup>モ</sup> ツ<sup>ー</sup>ジ<sup>ソ</sup>ダ。 (A笑)  
 よ。 大<sup>体</sup> ど<sup>こ</sup>で<sup>も</sup> 通<sup>じ</sup>そ<sup>う</sup>だ。

ネ<sup>ー</sup>。 ツ<sup>ー</sup>ジ<sup>ル</sup> コト<sup>バ</sup>デ<sup>ス</sup> ヨ。 ソ<sup>ー</sup>。  
 ね<sup>え</sup>。 通<sup>じ</sup>る 昔<sup>葉</sup>で<sup>す</sup> よ。 う<sup>ん</sup>。

X型が一文中に2回現われている。

実例2 石川県小松市大杉本町 朝日春子 (明42)

ソ<sup>ー</sup>。 デ<sup>ケ</sup>ー ア<sup>ノ</sup>ー イ<sup>エ</sup> カ<sup>マ</sup>エ<sup>テ</sup>   
 う<sup>ん</sup>。 だ<sup>か</sup>ら あ<sup>の</sup>り、 家<sup>を</sup> 構<sup>え</sup>て

ア<sup>ー</sup>ン<sup>テ</sup> オ<sup>イ</sup>デ<sup>タ</sup>ン<sup>ヤ</sup>。 (E<sup>ハ</sup>ー<sup>ハ</sup>ー。)  
 お<sup>ら</sup>れ<sup>た</sup>の<sup>だ</sup>。 は<sup>い</sup>は<sup>い</sup>。

ソ<sup>ノ</sup>ー ヤ<sup>ッ</sup>バ<sup>リ</sup> シ<sup>ソ</sup>ン<sup>ヤ</sup>ケ<sup>ー</sup>…  
 そ<sup>の</sup>う や<sup>は</sup>り 子<sup>孫</sup>だ<sup>か</sup>ら…

(E<sup>ハ</sup>ー<sup>ソ</sup>ー<sup>デ</sup>ス<sup>カ</sup>。) ハ<sup>ー</sup> サ<sup>イ</sup>ト<sup>カ</sup>…  
 は<sup>あ</sup>、そ<sup>う</sup>で<sup>す</sup> か。 は<sup>あ</sup>、 そ<sup>れ</sup>ど<sup>か</sup>、

エ<sup>ー</sup> マ<sup>ー</sup> サ<sup>ナ</sup> カ<sup>タ</sup>デ ネ<sup>ー</sup>ケ<sup>ド</sup>   
 え<sup>え</sup>、 ま<sup>あ</sup> そ<sup>ん</sup>な 型<sup>で</sup>(は) な<sup>い</sup>け<sup>れ</sup>ど。

(E<sup>ソ</sup>。) ソ<sup>ン</sup>ダ<sup>ケ</sup>ド ヤ<sup>ッ</sup>バ<sup>リ</sup> デ<sup>ケン</sup>  
 う<sup>ん</sup>。 だ<sup>が</sup>、 や<sup>は</sup>り だ<sup>か</sup>ら

ア<sup>ノ</sup>ー ソ<sup>ー</sup>ユ ト<sup>キ</sup>ャ<sup>ー</sup> ナ<sup>ー</sup>。 ナ<sup>ン</sup>カ  
 あ<sup>の</sup>り、 そ<sup>う</sup>い<sup>う</sup> 時<sup>は</sup> ね。 何<sup>か</sup>

ア<sup>ノ</sup>ー フ<sup>ネ</sup>カ ナ<sup>ン</sup>カ<sup>デ</sup> コ<sup>ー</sup> シ<sup>ズ</sup>ン<sup>デ</sup>テ<sup>ー</sup>  
 あ<sup>の</sup>り、 船<sup>か</sup> 何<sup>か</sup>で こ<sup>う</sup> 沈<sup>ん</sup>で<sup>い</sup>て、

デ<sup>ン</sup>ブ コ<sup>エ</sup>タ<sup>ラ</sup>シ<sup>ー</sup> ワ。 ホ<sup>レ</sup> コ<sup>ノ</sup>  
 全<sup>部</sup> 越<sup>え</sup>た<sup>ら</sup>し<sup>い</sup> よ。 ほ<sup>ら</sup> こ<sup>の</sup>

ワ<sup>タ</sup>ン<sup>ラ</sup>ノ シ<sup>ェ</sup>ン<sup>ソ</sup>ノ オ<sup>バ</sup>サン<sup>ガ</sup>   
 私<sup>ら</sup>の 先<sup>祖</sup>の 伯<sup>母</sup>さん<sup>が</sup>

(E<sup>ソ</sup>。) ア<sup>ノ</sup>ー ナ<sup>ン</sup>ジャ イ<sup>テ</sup>。  
 う<sup>ん</sup>。 あ<sup>の</sup>う 何<sup>だ</sup>(と<sup>か</sup>) 言<sup>っ</sup>た。

ケ<sup>ガ</sup>ノ ゲ<sup>ン</sup> ゲ<sup>ン</sup>ロ<sup>ク</sup>ノ ソ<sup>レ</sup> ホ<sup>ラ</sup> ア<sup>ノ</sup>  
 元<sup>禄</sup>の それ、 ほ<sup>ら</sup>、 あ<sup>の</sup>

ゲ<sup>ン</sup>ロ<sup>ク</sup>ソ<sup>デ</sup> チ<sup>ュ</sup>テ (E<sup>ハ</sup>ー<sup>ハ</sup>ー。  
 元<sup>禄</sup>袖 と<sup>い</sup>っ<sup>て</sup> は<sup>あ</sup>、は<sup>あ</sup>。)

ム<sup>カ</sup>シ イ<sup>ー</sup>ヨ<sup>ッ</sup>タ。 (E<sup>ハ</sup>イ。) ソ<sup>ン</sup>ナ  
 昔 言<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>た。 (はい。) そ<sup>ん</sup>な

キ<sup>モ</sup>ン キ<sup>テ</sup> ソ<sup>ー</sup>ナ ア<sup>ノ</sup>ー オ<sup>イ</sup>デ<sup>タ</sup>ー  
 着<sup>物</sup>(を) 着<sup>て</sup> そ<sup>ん</sup>な あ<sup>の</sup>う お<sup>ら</sup>れ<sup>た</sup>と<sup>い</sup>う

チュ コト キ<sup>ー</sup>ト<sup>ル</sup>ケ<sup>ド</sup> (E<sup>ハ</sup>イ<sup>ソ</sup>ー。)  
 こ<sup>と</sup>(を) 聞<sup>い</sup>て<sup>い</sup>る<sup>け</sup>れ<sup>ど</sup> (そう。)

ア<sup>タ</sup>シ<sup>ラ</sup> ソ<sup>ン</sup>ナ モ<sup>ン</sup>…  
 私<sup>ら</sup>(は) そ<sup>ん</sup>な も<sup>の</sup>…

この場合は、X型もY型も出現している。

実例3 石川県河北郡内灘町大根布 高道わい (明29)

ハ<sup>イ</sup> ソ<sup>シ</sup>テ ド<sup>ッ</sup>コ シ<sup>ラ</sup>ベ<sup>テ</sup>モ<sup>ー</sup>  
 も<sup>は</sup>や、 そ<sup>し</sup>て ど<sup>こ</sup>(を) 調<sup>べ</sup>て<sup>も</sup>

(E<sup>ソ</sup>。) コ<sup>ノ</sup> ネ<sup>ー</sup>。 ジ<sup>ェ</sup>ー<sup>タ</sup>ク<sup>ン</sup>  
 う<sup>ん</sup>。 こ<sup>の</sup> ね。 質<sup>沢</sup>に

ソ<sup>ダ</sup>ッタ コ<sup>ー</sup> ダ<sup>メ</sup>ヤ ツ。 (E<sup>ソ</sup>ー。  
 育<sup>っ</sup>た 子<sup>は</sup> 駄<sup>目</sup>だ ぞ。 う<sup>ん</sup>。)

ク<sup>ロ</sup>ー シ<sup>ナ</sup> ダ<sup>メ</sup>ヤ。 ク<sup>ル</sup>シ<sup>ー</sup>  
 苦<sup>労</sup>(を) し<sup>な</sup>け<sup>れ</sup>ば 駄<sup>目</sup>だ。 苦<sup>し</sup>(さ<sup>を</sup>)

シ<sup>ェ</sup>ー<sup>シ</sup>ェ<sup>ー</sup> ネ<sup>ー</sup>。 コ<sup>ー</sup> ユ<sup>ー</sup> コ<sup>ト</sup>  
 し<sup>な</sup>が<sup>ら</sup> ね。 こ<sup>う</sup> い<sup>う</sup> こ<sup>と</sup>(を)

シ<sup>ト</sup>ッタ<sup>ラ</sup> ダ<sup>メ</sup>ヤ<sup>ッ</sup>タ<sup>テ</sup> コ<sup>ー</sup> ユ<sup>ー</sup> コ<sup>ト</sup>  
 し<sup>て</sup>い<sup>た</sup>ら だ<sup>め</sup>だ<sup>っ</sup>た<sup>と</sup> こ<sup>う</sup> い<sup>う</sup> こ<sup>と</sup>(を)

シ<sup>タ</sup>ラ ヨ<sup>カ</sup>ッタ<sup>テ</sup> ジ<sup>ブ</sup>ン<sup>ナ</sup> ジ<sup>ブ</sup>ン<sup>デ</sup>  
 し<sup>て</sup>い<sup>た</sup>ら 良<sup>か</sup>っ<sup>た</sup>と 自<sup>分</sup>で

ア<sup>ノ</sup>ー ク<sup>ロ</sup>シ<sup>タ</sup>ン<sup>カ</sup>ー ケ<sup>ン</sup>キ<sup>ュ</sup>ー<sup>シ</sup>テ<sup>ク</sup>サ<sup>カ</sup>イ  
 あ<sup>の</sup>り 苦<sup>労</sup>し<sup>た</sup>の<sup>が</sup> 研<sup>究</sup>し<sup>て</sup>ゆ<sup>く</sup>か<sup>ら</sup>

ナ。 (E<sup>ハ</sup>ー<sup>ハ</sup>ー。 ) ヨ<sup>ー</sup> ナ<sup>ッ</sup>テ ソ<sup>ン</sup>デ  
 ね。 (はいはい。) 良<sup>く</sup> な<sup>っ</sup>て、 そ<sup>れ</sup>で

ム<sup>カ</sup>シ コ<sup>コ</sup>ニ マ<sup>ー</sup> デ<sup>ー</sup>ジ<sup>ン</sup> ナ<sup>ッ</sup>タ モ<sup>ン</sup>  
 昔 こ<sup>こ</sup>に ま<sup>あ</sup> 大<sup>臣</sup>(に) な<sup>っ</sup>た 者<sup>(は)</sup>

ミ<sup>ン</sup>ナ ム<sup>カ</sup>シ<sup>ノ</sup> ク<sup>ロ</sup>シ<sup>タ</sup> シ<sup>ト</sup>バ<sup>ッ</sup>カ<sup>リ</sup>デ  
 皆 昔<sup>の</sup> 苦<sup>労</sup>し<sup>た</sup> 人<sup>は</sup>が<sup>り</sup>で

(E<sup>ア</sup>ー<sup>ソ</sup>ー<sup>デ</sup>ス<sup>カ</sup>。) ア<sup>ン</sup>タ ア<sup>ノ</sup>ー オ<sup>ラ</sup>ン  
 あ<sup>あ</sup>、そ<sup>う</sup>で<sup>す</sup> か。 ) ね<sup>え</sup>、 あ<sup>の</sup>り 私<sup>(か)</sup>

テ<sup>レ</sup>ビ ミ<sup>タ</sup>リ シ<sup>ン</sup>ブ<sup>ン</sup> ミ<sup>タ</sup>リ<sup>シ</sup>テ   
 テ<sup>レ</sup>ビ(を) 見<sup>た</sup>り 新<sup>聞</sup>(を) 見<sup>た</sup>り<sup>し</sup>て

(E<sup>ハ</sup>イ。) ヒ<sup>ジ</sup>ョ<sup>ー</sup>ニ ク<sup>ロ</sup>ー<sup>シ</sup>タ ヒ<sup>ト</sup>ッ  
 はい。 非<sup>常</sup>に 苦<sup>労</sup>(を)し<sup>た</sup> 人<sup>は</sup>

ミンナ クロシタ ヒトヲ ミンナ シュッシエ  
皆 苦労した 人は 皆 出世  
シトツテヤ ネー。 ソー。  
しておられる ね。 うん。

これは話者の人生訓の表出である。X型が2回現われているが、Y型は見られない。

実例4 富山県氷見市中田 中村文枝 (大12)

ソ。 イッテモ アンター。 アンガイ ワタシオ  
うん。 行っても あんた。 案内 私を

ナカナカ アカセンデヤ モン。 ワタシノ  
なかなか 理解しないのだ もの。 私の

ウエノカ° イッテデモ ネ。 (E. ハイ。)  
上の(姉)が 行ってでも ね。 (はい。)

ナーイーカ°ニョ。 ワカラシ。  
何が良いものか! 分からない。

ワカラシチュ。 コト ナイデ ナカイ コト  
分からないということも 無いから 永い こと

オレバ ワカルデンジョーケド (E. ハイ。)  
居れば 分かるでしょうけれど (はい。)

ワタシ ソンナ ナカイ コト アノ ヒトノ  
私 そんな 永い こと あの 人の

キニ イルマデ ワタシ オラン モン。 スク°  
気に入るまで 私 居ない もの。 すぐ

キテ シマウ。  
来て しまう。

X型が、文末に現われている。こういうのは稀である。  
たいていは文中に認められるようである。

次はY型について考えてみる。

② Y型…… ㄣ、ㄣ

実例5 福井県三方郡美浜町郷市 清池とみ (明35)

イヤ イヤ。 キョードージャ ナイ。  
いえ いえ。 共同では ない。

ワタシ トコノ ウラデ。 (E. ハーハー。)  
私の所の 裏で。 (はい。)

アエ ナー。 ツルベデ ㄣ コノ タンビニニ  
あの ね。 つるべで この その度に

ヤッテ ㄣ (E. ソー。 ) アッチャト コッチャトノ ㄣ  
やって、 (うん。 ) あっちと こっちとの

アノ コンナ ツルベオ ㄣ (E. エー。 )  
あの こんな つるべを (ええ。 )

アノー ナニオ…。 (E. オケニ) バケツオ  
あのう、 何を。 (桶に) バケツを

ナ。 コンナ チーシューアー バケツオ アッチャト  
ね。 こんな 小さい バケツを あっちと

コッチャト マワシテ ク クルマデ マワシテヤ ㄣ  
こっちと 回して \*\*\* 車輪で 回しては

(E. ハー。 ) クンダンデス。 (E. ホー。 )  
はあ。 汲んだんです。 (ふうん。 )

エー ソシテ アンタヤタニ。  
そして …。

Y型がきわめて顕著に見られる実例として、上の例は  
注目される。X型は併用されていない。

実例6 岐阜県吉城郡宮川村杉原 洞ふさ (明35)

ウチジャ サ。 ナーモカモ ヤットルンジャ。  
家じゃ ね。 何もかも やっているのだ。

コノ ムラデモ ヨ。 ウチダケジャ。 (E. 笑)  
この 村でも \*\*\* 家だけだ。

クワ カ° アルモンデ ネー。 アノー サー  
桑 が あるから ね。 あのう、 さて

サンダンモ ヨンダンモ アルデ ネーエ。  
三反も 四反も あるから ね。

ホンデ ネー。 クワノ サラエーマ ワカエー  
それで ね。 桑の サラエーマ 若い

モナー ヤッテ クレルケー エーヤケド ㄣ  
者は やって くれるから いいのだけれど

(E. ハー(笑) ) ネンジュー サ。 イマワ  
はあ ) 年中 ね。 今は

イエー ワネー。 アノー カエーコデモ  
いいわね。 あのう、 蚕でも

オーキクシテ モラエルデ ムカシワ  
大きくして もらえるから。 昔は

チサンチュー カラ ハヤ ネー。  
稚蚕虫 から、 もはや ね。

(E. エー ) シトツ ケコカラ ヤシナッタ  
ええ。 ) 一つ 毛蚕から 養った

ノ。 ワンタチノ ジダエーワ。  
の。 私たちの 時代は。


(E. アー ソーデス カ。 ) イマワ ネー。  
(ああ、そうです か。 ) 今は ね。

(E. エー )  
ええ。 )

かなりたくさんの方が表現されている。しかし、Y型  
は1回しか現われていない。富山県境に近い岐阜県側  
の山間奥地であり、ここにも波動音調の影響が及んで  
いる。


実例7 石川県小松市大杉本町 朝日春子 (明42)

ソ。 ソーヤー。 ムカシ ヤッパリ ㄣ  
うん。 そうだ。 昔 やはり

コレーナ ハッチョーモドン イテ   
こんな 「はっちょう殿」と 言って


(E. ヤー) ハヤ アノー エマデ  
はい。 もう あのう 今で


マコレカマデ ソノ ウチャー  
その 家は

タツタタケド  (E. ソー) ソノー  
建っていたけれど うん。 そのう、

ゲンカンサキダケ。 (E. アー ソーデス カ。) ジュミョー コニャー  
玄関先だけ。 ああ、そうですか。 寿命(が) 来なければ



ソー エマノ ホラ オミヤノ チョード  
うん。 今の ほら、 お宮の ちょうど、

アンタガ オエダタ  (E. ハイ。) アンタ ドー  
あなたが 果られた はい。 あなた、 どう

オミヤサンノ ヨコニ  (E. ハイ。) ナリマスン エ。 ドーモ シテ アケラレンシ  
神社の 横に はい。 なりますの か。 どうも して あげられないし

アロニ……。  
あそこに。

これは、X型の例として引用した実例2と同じ話者である。上述したように、実例7においても、XとYとが共存している。なぜ一方がY型になり、他方がX型になるのかは、はっきりとは分からない。ただ、X型のほうが、文中での屈折の大きい所に出現しているように見られる。Y型はそれに対し、軽く訴えかけながら展開する所で現われているように見られる。微妙な用法差が存するようである。

③ Z型…… 、

実例8 福井県大飯郡高浜町若宮 掛谷竹子(明35)

ウチャー ソノ シキデス ネヤ。 マー ソラ  
我が家は その 方式です のよ。 まあ それは

ハンタエー ウッテ イーナル シトモ  
反対を 打って 言われる 人も

アリマスケード ウチノ イエワー アノ  
ありますけれど 私の 家は あの

ムカシカラ ムカシノ オジーサンカラ ソンナ  
昔から 昔の お爺さんから そんな

ヨーナ ウチデス デ ナー。  
ような 家です から ね。

(E. ア ソーデス カ。) ホンデ ソンナン  
あ、そうですか。 だから そんなの

ベツニ ソナエー ハンタエー ウッテ  
別に そんなに 反対(を) 打って

マー (E. (笑)ア-) オトヒャータク イワント  
まあ ああ 無理(を) 言わずに

チョーノ タメヤシ マー アル テード マー  
町の 為だし、 まあ ある 程度 まあ

ギシェーン ナッテ (E. アー) ユー ユーテ  
犠牲に なって ああ。 言って

シトリマス。  
しております。

実例9 富山県氷見市中田 中村文枝(大12)

ソーソー。 シカタ ナイ ワイネ。  
そうそう。 仕方(が) 無い わね。

(E. エー) ジュミョー コニャー  
ええ。 寿命(が) 来なければ

ナクナラレンカラー モラッテ キタ ヒー  
亡くならないから 買って 来た 日が

クルマデー ハッショラニキニ アンタ ドー  
来るまで 来るまで あなた、 どう

ナリマスン エ。 ドーモ シテ アケラレンシ  
なりますの か。 どうも して あげられないし

ネー。  
ねえ。

これらのZ型の特色は、Y型と混同しがちである。しかし、Y型の上昇は著しいのに対し、Z型はそれよりも音の上昇が弱く、しかも高平を保つ点で相違が認められる。Z型は、実例8では「ウチワー」、「イエワー」、「ウチデスデ」、「ユーテ」のように現われた。それに対し、実例9では「クルマデー」の1箇所だけである。

以上が、波動音調X型、Y型、Z型の具体例についての記述であった。次に、これらの波動音調の分布について考えてみたい。

図4は、中部地方の各県3地点ずつの自然会話を分析したかぎりでの、波動音調の分布である。これを見ると、X型の波動音調が、福井県と石川県と富山県にわたって分布しているのが注目される。「詞+辞」のまとまりの後で、間投助詞つまり語繋詞(文末詞のこと)が添加せずに、その代わりに波動音調が使われているのである。上下にたゆたう独特の音響は、人を異郷へ誘うようでもあり、人を音楽の陶醉に親しませるようでもある。この波動音調は、話者の内省によれば、次の語を採すための間を埋めるための埋め草として置かれるというものでないらしいのである。以上の9例を見る範囲では、X型がどういう所に現われ易いかといえば、まず句点の後ではないということ、また、連体修飾語の後ではなく、格助詞や接続助詞によって導かれた連体修飾語の後に生じ易いということが、薄々分かる。

さて、Y型はX型と同一文中に共起することがあり、役割分担が決まっているのように見られる。しかし別の文ではX、Yの文法的位置が逆の所でそれぞれ



れに生じていたりするので、はっきりとX、Yの生起する文法的位置を規定することは、今のところ保留にしておきたい。

ただし、XとYとの共存、YとZとの共存、あるいは分布領域の近接により互いに三者は深いつながりがあることだけは確かである。依存関係はありそうだが、どちらからどちらへ移行したかというような歴史的過程については、まだ明快な発言ができない。しかし、Y型の分布の広さや、Y型が原初的な抑揚形態であることなどから判断して、X型よりも古くからのものと解することが許されるかもしれない。また、Z型はX、Y型との深い関係があり、いわゆる「後上がり調」として、山陰地方の海岸とのつながりが予想される。

ところで、図4の波動音調を語アクセントの分布と重ね合わせて論じる行き方は常道であろう。あえてそれを行わず、会話の姿勢（形式）や次で述べる話繋詞（文末詞）との関係で問題にしようとしているのは、

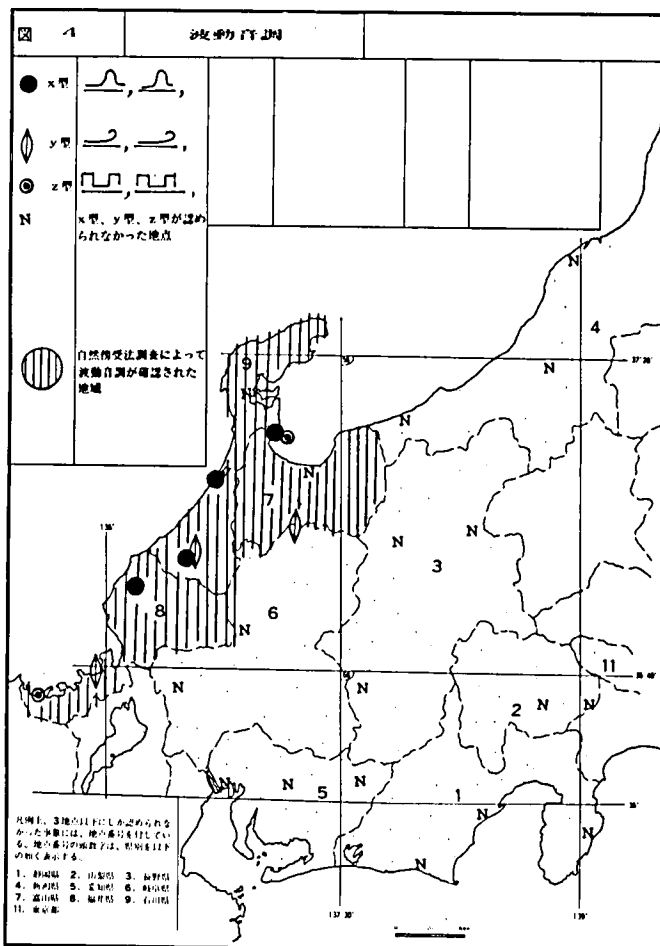
統一体としての方言会話の特質を考慮してのことである。

### (三) 心やすさの波動音調と話繋詞との関係

波動音調は、心やすい人とうちとけて話す時に発現するものと言われることがある。図4で示された、北陸地方で聞かれる波動音調は、筆者が自然会話に参加している間、どのような待遇状況と呼応していたのであろうか。仮りに、波動音調が、心やすい雰囲気醸成されたときに発生しやすいということであれば、それを検証することができるであろう。以下では、波動音調が、心やすいうちとけた状況において発現しやすいかどうかを考えてみることにする。

図5は、方言会話中の話繋詞<sup>11)</sup>の図である。これは、中部地方の25地点における各2分間ずつの方言会話を文字化し、その中に見出された話繋詞（文末詞）を集計したものである。「心やすさの話繋詞」としたのは中部地方の176地点について、心やすい人に呼びかけるときの言い方を、別の調査項目で尋ね、その中で、話繋詞を聞き出しているのである。そこで、25地点についての方言会話中に聞かれた話繋詞のうち、心やすい人に言う時の訴えことばが見られたら、その語に星印をつけることにした。また、心やすさの話繋詞を使って筆者との方言会話が行われた地点には、◎（二重丸符号）を与えた。その反対に、その方言会話で心やすさの話繋詞を使わず、よそよそしさの話繋詞で応待された場合は、△（三角印）を与えた。こうして、図5の様相を見ると、波動音調の認められた北陸地方では、筆者との方言会話で丸符号になっており、心やすさの話繋詞で待遇されていたことが知られる。その他、岐阜県、愛知県、静岡県太平洋側を除いた全ての中部地方で、筆者は心やすい人としての待遇を方言会話において受けたと解することができる。

以上、心やすい関係が整えられたことによって、北陸地方での波動音調が発現したというような安易な対応関係を指摘するつもりはない。が、少なくとも、波動音調の発現に、障害が少なかつたであろうということは言えるのではないかと思う。



四 方言会話中の訴えの文と叙述の文との関係

波動音調は文末でなくて、文中に発現することが多い。「あのネ、きのうネ、学校でネ、私がネ…」のような「ネ」に当たる部分で、波動音調が見られる。したがって、「ネ」のような話繋詞の代わりにするのが、波動音調であると考えてもよからう。では、どうして、同じ働きをするものが衝突しないのであろうか。また、話繋詞で用が足りるところを、どうして波動音調に分業させるのであろうか。

そこで、このようなことを検討してみるために、図6を作成した。図6に訴えの文と叙述の文との比率を出してみた。これは、2分間の方言会話中に見出された文の総数のうち、話繋詞が来て文が終止するものと、話繋詞が来なくて動詞や助動詞その他の品詞で終止する文との比率を出して、分布図に表したものである。25地点それぞれに分数で示し、分母に全体の文の数を、分子に話繋詞の数を実数で表した。

これを見ると、平均が49.5%であるから、北陸地方のうち、石川県地方で、若干ではあるが、話繋詞以外で終る文の方が、話繋詞で終る文よりも高い比率になっている。しかし、福井県南部ではその反対に、話繋詞で終る文が多くなっている。

中部地方の全域をながめてみたとき、心やすくない話繋詞で待遇した岐阜県、愛知県、静岡県各地点では、話繋詞で終る文と話繋詞以外で終る文との百分率に共通のパターンは見られない。つまり、有意な傾向は見られないということである。しかし、さらに再び石川県小松市大杉本町の例を眺めてみると、31文中7例しか話繋詞が出現していないということ、また石川県河北部内灘町大根布田の場合、32文中11例しか話繋詞が用いられていないことが注目される。少なくともこの2地点については、上掲の実例2、実例3で知られるように、他の地域でなら話繋詞が用いられるような場面にも、波動音調が用いられていると見てよいのではないかと思う。ただし、図6は、その必然性については語っていない。蓋然性について、少しのことが言えるばかりである。

また、図6では、波動音調というものが、心やすい待遇場面で出現しやすいということであるために、結果として、話繋詞の出現を誘発しているという事情も否定できない。たとえば、テレビでニュースが読まれるときには、「～ネ、～ネ、～ネ…」というような話繋詞は出てこない。あらたまった場では、それは出ないものである。

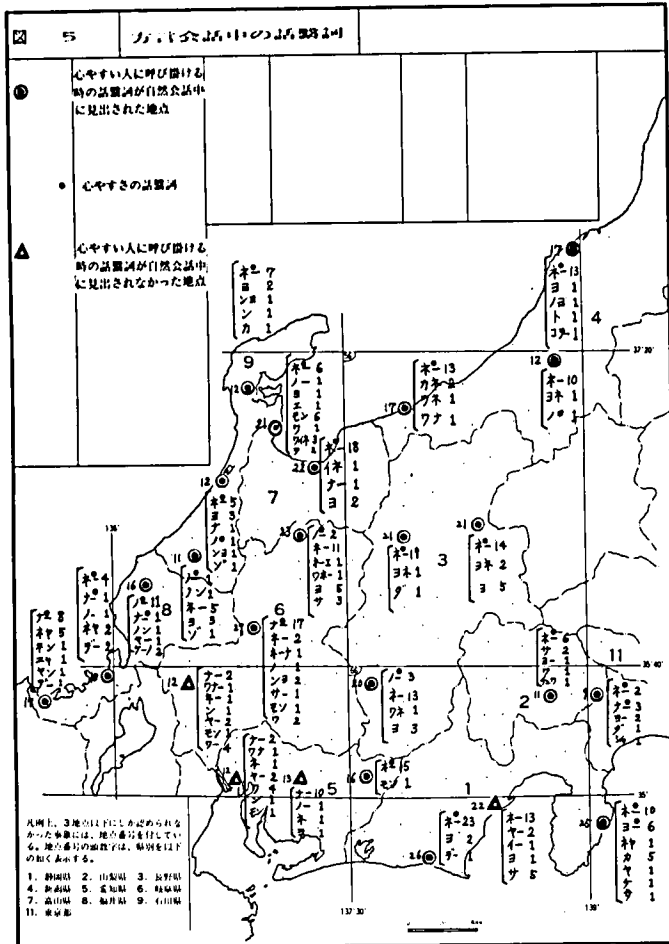
したがって、訴えの文（話繋詞で終る文）と叙述の文（話繋詞以外で終る文）との対応について考え、それらと波動音調との関係を検討しようとしたが、傍証的な結果を得る程度に留まった。

したがって、訴えの文（話繋詞で終る文）と叙述の文（話繋詞以外で終る文）との対応について考え、それらと波動音調との関係を検討しようとしたが、傍証的な結果を得る程度に留まった。

五、結び

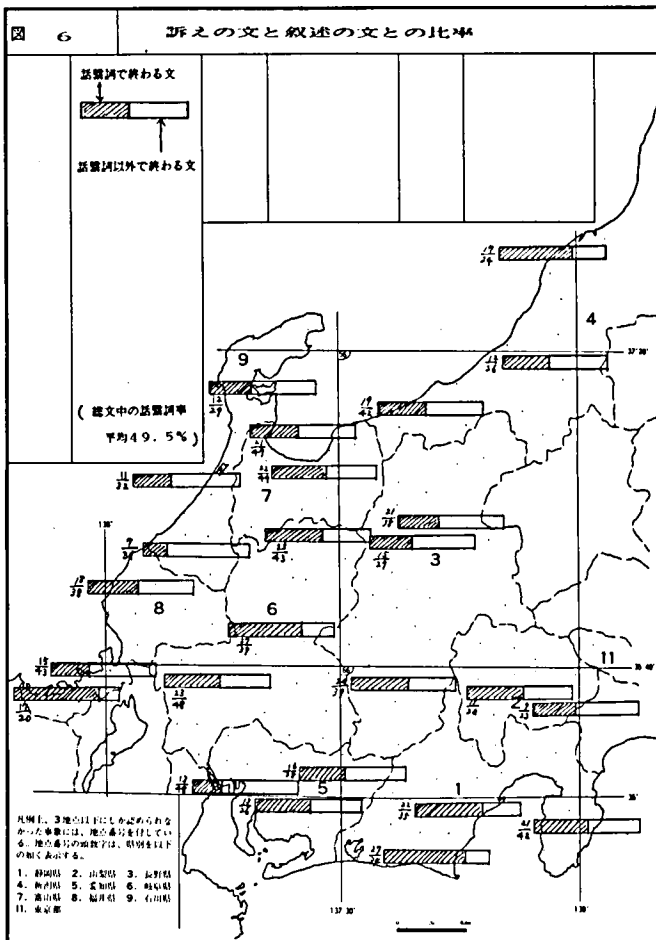
以上の考察を通して確かめられたことがらや、明らかにされた事実を簡潔書きにすれば、次のとおりである。

- ① 方言会話は話者の書きことばを対象内に取りこまない点で、方言談話とは異なる概念である。筆者は「方言会話」という術語を専門語として使用したいと考える。



- ② 方言会話の方言地理学的研究が可能である。特に、文化地理学としての方言類型論地理学が期待される。これは、今後に発展する可能性が高い。
- ③ 方言類型論地理学の一事例として「朝の挨拶表現の連接法と発想法」が注目される。挨拶会話の発想法の伝播に興味もたれる。
- ④ 北陸地方の方言会話に見られる「波動音調」は、福井県、石川県、富山県に分布する。それらは三種類の型を示す。
- ⑤ それらの波動音調は、「心やすさの話繋詞」と共起する蓋然性を示す。

これら5つの結論は、方言地理学のねらいとする言語の歴史的变化の説明に、あまり深く関与していないように見える。しかし、全く無関係に存立しているわけでもない。方言会話という大きな単位を問題とする場合には、本稿のように、相対的な文化の移動や対応を論及することになるのは当然であろうと考える。



<注>

- 注1 久野暉『談話の文法』(1978年)
- 注2 時枝誠記『文章研究序説』(1969年)
- 注3 西尾実『言語生活の探求』(1961年)、「談話生活の問題とその指導」(『国語学』1、1948年)
- 注4 藤原与一「生活語としての方言の研究」(『国語学』2、1949年)
- 注5 松田正義『方言生活の実態』(1960年)
- 注6 山口幸洋『静岡県本川根方言の文』(1965年)
- 注7 林四郎『言語表現の構造』(1974年)
- 注8 南不二男「日常会話の構造——とくにその単位について」(『言語』1-2、1972年)
- 注9 永野賢『学校文法文章論』(1959年)
- 注10 市川孝『国語教育のための文章論概説』(1978年)
- 注11 長田久男『国語連文論』上下、(1981年)
- 注12 波動音調という術語は、江端が私的に使い始めたものである。藤原与一先生は織田町の例について、「ゆすりアクセント」と呼称しておられる。山口幸洋氏、上野善道氏、吉田則夫氏、新田哲夫氏らにも、北陸の特殊な抑揚についての論考が見られるようである。今は私なりに、波動音調ととらえておくことが望ましいと考えている。

- 注13 藤原与一先生が、文の次元で文末詞と言われていたものを、筆者は方言会話の次元でこれを、話繋詞と見なしている。
- 注14 柴田武監修『全国方言資料』3、(1981年)には、本稿と同一の地点(石川県河北郡内灘町大根布)が収録されており、同様の波動音調が聞かれる。

<参考文献>

- 1. 国立国語研究所編『談話行動の諸相』(1987年)
- 2. T. A. van Dijk 編 HANDBOOK of DISCOURSE ANALYSIS I~IV(1985年)
- 3. W. A. グロータース『日本の方言地理学のために』(1976年)